

大津 歴博 だより

2007
No.68

第44回企画展

戦国の大津

天下統一の夢 — 坂本城・大津城・膳所城 —

10月6日(土)～11月18日(日)



坂本城跡出土鯨瓦
本館蔵



豊臣秀吉画像
西教寺蔵



近江八景図屏風に描かれた膳所城 本館蔵



大津市歴史博物館

企画展「戦国の大津」

天下統一の夢

坂本城・大津城・膳所城

一六世紀末から一七世紀初頭、三人の戦国武将が、大津の地に城を構えました。織田信長が元龜二年（一五七二）の山門焼き討ち後に坂本城を、豊臣秀吉が天正一四年（一五八六）頃に大津城を、そして関ヶ原合戦に勝利した徳川家康が慶長六年（一六〇二）頃に膳所城を築きました。

これら三城は、戦国乱世から天下統一へと向かう激動の時代を象徴する、日本の歴史上においても特筆される重要な城でした。本展では、いまだ謎の多いこれら三城の縄張りや歴史的な役割を、戦国武将の画像や木像、金箔瓦などの出土遺物、城跡の地形を推定できる絵図などの歴史資料、古文書によって明らかにします。

坂本城

元龜二年（一五七二）、織田信長による山門焼き討ちの後、信長の命を受けた明智光秀が山門監視のために築いた城。現下阪本三丁目の湖岸には、今も本丸の石垣が残っています。

このコーナーでは、摠見寺蔵の織田信長画像や、信長に敵対した山岡道阿弥の画像や木像（圍城寺

蔵）、山門焼き討ちにまつわる光秀書状、また昭和五四年に実施された坂本城跡発掘調査によって出土した鯺瓦や坂本城炎上の際にできた、焼けて変形した瓦類、坂本城主時代の浅野長吉に関する古文書（西教寺蔵）、城跡の所在を示す周辺絵図、また山門再興を許可した豊臣秀吉の判物（延暦寺蔵、重要文化財）や横川中堂の再建棟札（同寺蔵）などを展示します。

大津城

大津城は、天正一四年（一五八六）頃、豊臣秀吉が坂本城を廃城とし、新たに現浜大津の湖岸に築いた城です。この大津城が歴史に名を残すことになったのは、天下分け目の関ヶ原合戦を前に戦われた大津籠城戦でした。

大津城については、地元の郷土史家が、長年に渡って城郭の規模などを研究、それらの成果に従って、大津市教育委員会による発掘調査も実施され、数多くの成果があがっています。

ここでは、重要文化財の豊臣秀吉画像（西教寺蔵）を始め、戦国女性を描いた優品として知られる松の丸（誓願寺蔵）やお初の画像（常高寺蔵）、関ヶ原合戦で敗れた石田三成の画像（大阪城天守閣蔵）、大津城跡出土の金箔瓦などを展示。それとともに、いまだ謎の多い大津城の縄張りについても、最新の発掘成果を交えて紹介します。

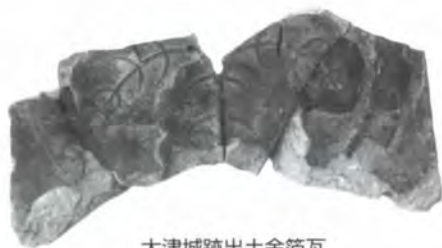
膳所城

膳所城は、慶長六年（一六〇二）頃、徳川家康によって、大津城から移された城といわれています。また今回紹介する三城では、唯一絵画資料が残されており、湖に突き出た膳所城の雄姿をうかがうことができます。

ここでは、徳川家康画像（延暦寺蔵）や初代膳所城主戸田一西の木像（縁心寺蔵）、膳所城を描いた近江八景図屏風や、寛文二年（一六六二）、近江を震源地として発生した大地震によって倒壊した膳所城の詳細な平面図、元禄一五年（一七〇二）の膳所総絵図、膳所城主本多家の立葵の紋が施された軒丸瓦や鯺瓦などを展示します。

主な展示作品（会期中展示替えをします）

- | | | |
|-----------|----|----------|
| △織田信長画像 | 一幅 | 摠見寺蔵 |
| 坂本城跡出土遺物 | 一括 | 大津市教委保管 |
| 山岡道阿弥画像 | 一幅 | 個人蔵 |
| ◎安土山下町中掟書 | 一卷 | 近江八幡市蔵 |
| ◎山門再興判物 | 一紙 | 延暦寺蔵 |
| △明智光秀書状 | 一紙 | 個人蔵 |
| ◎豊臣秀吉画像 | 一幅 | 西教寺蔵 |
| 松の丸画像 | 一幅 | 誓願寺蔵（前半） |
| □お初画像 | 一幅 | 常高寺蔵（後半） |
| 大津城金箔瓦 | 一括 | 大津市教委保管 |



大津城跡出土金箔瓦
大津市教委保管



戸田一西木像 縁心寺蔵

○会期中には、記念講演会や国友火縄銃の実演、大津城などの謎に迫るトークバトルなど、多彩な行事を行いますので、ご期待ください（詳細は歴史博物館までお問い合わせください）。

- 石田三成画像 一幅 大阪城天守閣蔵
- 徳川家康画像 一幅 延暦寺蔵
- 膳所城主戸田一西木像 一軀 縁心寺蔵
- 膳所地震修復願ヶ所絵図 一鋪 滋賀県立図書館蔵
- △膳所総絵図 一鋪 個人蔵
- 膳所城鯨瓦 一基 瀬田小学校蔵
- 近江八景図 六曲屏風 本館蔵
- ◎重要文化財 □県指定文化財 △市町村指定文化財



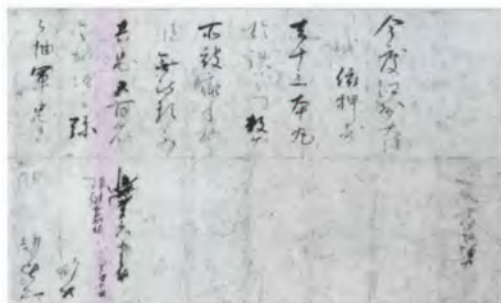
膳所総絵図 個人蔵



山岡道阿弥画像 個人蔵



寿芳院(松の丸)画像
誓願寺蔵



毛利秀包感状 本館蔵

第64回ミニ企画展

三井寺の慶長期の復興と金堂の再建

■ 10月23日(火)～11月25日(日)

前回実施のミニ企画展「匠の技を知る―園城寺と葛川明王院の保存修理現場から―」の続編で、今回は、現在修理中の園城寺金堂が再建された、園城寺の慶長期について、様々な資料から紹介します。

園城寺(三井寺)は、文禄四年(一五九五)に豊臣秀吉により闕所を言い渡され、寺院としての機能を停止させられます。寺内にあった仏像などの宝物は、園城寺の門跡寺院である聖護院や照高院などに疎開され、堂舎も他に移されたりしました。特に、中心の建物である金堂は、比叡山の復興のために西塔釈迦堂(現存)として移築されてしまいました。慶長三年(一五九八)に入りようやく闕所がとかれ、まずは唐院の再建が始まります。そして北政所より金堂と闕伽井屋の建立も始まり、本格的な復興が波に乗り、今見る寺観が整っていききました。

今回は、闕所後に行われた三井寺の復興について、特に建築に関する資料を中心に紹介します。「戦国の大津」展でも、三井寺復興関連資料を展示します。あわせてご覧下さい。



木造釈迦如来坐像 唐院三重塔
元和九年(1623)七条仏師康温作



金銅製風鐸 金堂使用
慶長四年(1599)銘

崇福寺は天智天皇の勅願により天智七年(六六八)に建てられた寺院で、大津宮の乾(北西)にあったとされています。この寺院跡は、滋賀里西方山中の三つの尾根上に位置しています。発掘調査により北尾根に弥勒堂、中尾根に塔と小金堂、南尾根に金堂と講堂が配置されていることが明らかになりました。現在、北・中尾根の建物群を崇福寺に、南尾根の建物群を桓武天皇が天智天皇追慕のために建立した梵釈寺とする説が有力です。

上高砂遺跡は、崇福寺の南東約1kmの山麓に位置する弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡です。昭和六十二年度の発掘調査で、平安時代の掘立柱建物跡・井戸跡・溝あるいは河川跡などが発見され、同時に、平安時代の土器が多量に出土しました。この中には墨書土器が約三〇点認められ、特に「南寺」の墨書土器が目されました。このような遺物の出土状況から、上高砂遺跡は寺院に關係する遺跡と考えられ、特に崇福寺あるいは梵釈寺との関連が想定されます。

今回のミニ企画展では、このような古代近江を考える上で貴重な遺跡である崇福寺と上高砂遺跡の資料について紹介します。

第65回ミニ企画展 大津の遺跡シリーズ6

崇福寺と上高砂遺跡

■ 11月27日から平成20年1月27日まで



上高砂遺跡出土 円面碗 大津市教委保管

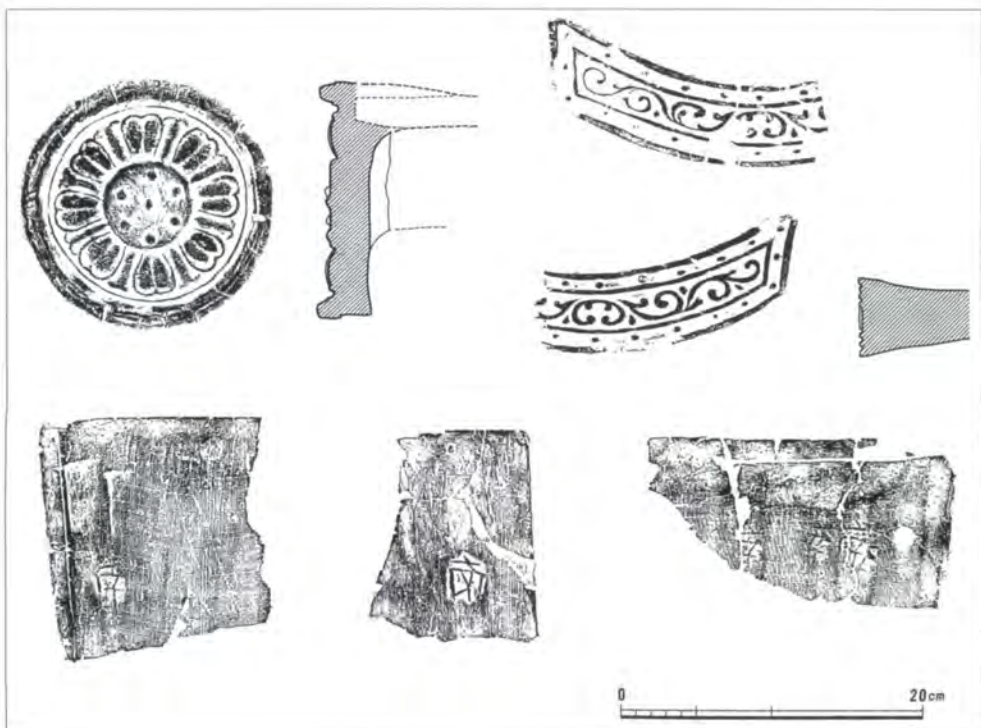
「南寺」の平瓦

上高砂遺跡は、大津市高砂町に所在する弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡です。昭和六二年度に実施された西大津バイパス建設工事に伴う発掘調査で、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器などの土器が多量に出土しました。この土器の中には「南寺」・「南前」・「大藪」・「一井」・「勢東」などの文字を墨で記した墨書土器が約三〇点認められました。墨書土器の中で特に注目されるのが三点確認された「南寺」と記されたもので、この墨書土器により平安時代に「南寺」と呼ばれていた寺院が存在したことが判明しました。しかし、「南寺」という名前の寺院については文献史料等には記載されておらず、現在のところ、文献史料からその所在地について明らかにすることはできません。そこで、上高砂遺跡の周辺にある遺跡の状況から、この「南寺」がどこにあったかを推察してみたいと思います。



「南寺」銘墨書土器

上高砂遺跡の北西約二〇〇mのところ、平安時代の遺跡である長尾遺跡があります。長尾遺跡では、昭和五二年に発掘調査が実施され、ロストル式平窯一基と梵鐘鑄造関連の遺構数基が発見されました。この平窯で焼成された瓦は、平安時代前期の軒丸瓦・軒平瓦・平瓦で、丸瓦は認められませんでした。軒丸瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦の一型式、軒平瓦も均整唐



長尾瓦窯出土瓦拓影・実測図

(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「檀木原遺跡発掘調査報告書Ⅲ」1981年による。)

草文軒平瓦の一型式でした。また、平瓦は凸面に縦方向の細かい縄叩き目を持つ一枚作りのものでした。この平瓦の中に裏字「南」の陽銘を押しし

たものが五七点あり、字体には、太字・細字の二種類がありました。この「南」銘平瓦が、「南寺」の所在を考える上でカギになってきます。京都の平安京内に造営された東寺や西寺跡からは、「東寺」銘平瓦や「西寺」銘平瓦が出土しています。これらの文字瓦は生産地で供給先を明示したものとみられます。このことから、長尾瓦窯においても平瓦の供給先（消費地）である「南寺」を意味する「南」を瓦に押印したと考えることができるのではないのでしょうか。

この長尾瓦窯で焼成された「南」銘平瓦が現在のところ消費地で出土していないため、「南」銘平瓦からは「南寺」の場所を知ることができません。しかし、この窯で焼成された複弁八弁蓮華文軒丸瓦が、崇福寺跡の南尾根の北斜面から出土しています。このことから他の軒平瓦や平瓦も崇福寺の南尾根の建物に供給された可能性が高いとみられます。



上高砂遺跡 昭和62年度調査



崇福寺跡

崇福寺跡は、上高砂遺跡の北西約1kmのところにある白鳳時代から平安時代の寺院跡です。「扶桑略記」によると、天智七年（六六八）に天智天皇の勅願で建てられた寺院で、大津宮の乾（北西）にあったといわれています。平安時代には十大寺のひとつに数えられるほど繁栄しました。崇福寺跡については、昭和三年に肥後和男氏が、昭和一三年から一四年にかけて柴田実氏が発掘調査を実施しました。これらの調査の結果、三つの尾根上に礎石建物が配置されていることが明らかになりました。南尾根上には、西側に基壇を設けた金堂と考えられている建物と、その東側に講堂と考えられている建物が配置されています。さらに、講堂の北側にも小規模な建物跡があります。また中尾根には、東西二つの基壇があり、西側の建物を小金堂、東側の建物を塔と考えられています。さらに北尾根には、弥勒堂と呼ばれる瓦積み基壇を設けた建物が配置されています。次にこの三つの尾根上に配置された建物を比べてみると、北・中尾根の建物群と南尾根の建物群とは、違いがあることが判明しました。北・中尾根の建物群と南尾根の建物群とは、建物の方向や礎石の形が異なり、さらに南尾根の建物群周辺から白鳳時代の遺物が出土していません。これらの違いから、現在、北・中尾根の建物群を崇福寺に、南の建物群を桓武天皇が天智天皇追慕のために建立した梵釈寺とする説が有力視されています。

以上のような上高砂遺跡周辺に所在する長尾遺跡や崇福寺跡の状況、すなわち、「南」銘平瓦を焼成していた長尾瓦窯の製品が崇福寺跡の南尾根の建物群に供給されていたこと、平安時代に崇福寺（北・中尾根の建物群）と梵釈寺（南尾根の建物群）が南北に並んでいたことなどから、崇福寺の南に位置する梵釈寺が平安時代に通称「南寺」と呼ばれていたと推察できるのではないのでしょうか。

（学芸員 青山 均）